

3歳児の仲間関係における身体接触

塚崎京子* 無藤 隆**

本研究は、3歳児の仲間関係における身体接触には、「仲間関係のはじまり」「仲間意識の共有」「仲間関係のアピール」という3つの機能があると予想して、これに沿った具体的な事例の考察を行なうことを目的とした。さらに、子ども同士が身体接触を成立させる要因を知るために、身体接触の成り立ちについての考察を行った。その結果、3歳児にとっては、ことばで明示的な仲間入りをするよりも、押したり、抱きついたりすることによって、仲間関係を成立させることが有効であることがわかった。また、身体接触は、相手を身近に感じたり、仲間意識を共有したり、感覚的刺激をとまなう面白さを味わうことができるだけでなく、離れた場所にいる人間にまでも他者と自分の親密な関係をアピールすることができることから、子どもは仲間関係において身体接触を積極的にやり取りしていることがわかった。

子ども同士の身体接触の展開を左右させる要因には、力の調節、状況判断、発話の有無、行為の方向性、意味の共通理解、認知、情動調節、体格のバランス、相性があることがわかった。親和的展開の要因としては、「力の調節、意味の共通理解、認知、相性の良さ、双方向的、ことばによる支え、情動調節」があり、一方、展開なし、及び反発的展開の要因としては、「力の未調節、体格差、曖昧な行為による意味の取り違い、認知不足、相性の悪さ、一方的、ことばを伴わない、状況判断の欠けた感情的・衝動的な状態」があることがわかった。

I. 問題と目的

保育園や幼稚園などの集団保育施設は、それ以前には大人との関係を中心に生活してきた子ども達が人生で初めて家庭外でほぼ同年齢の子ども達と仲間関係を形成し、仲間関係の原体験を培う重要な場であり(砂上・無藤, 1999)、遊びのなかで生じるものの取り合い、けんかや対立といった問題の解決方法を子どもは経験的に学んでいく。また、身体的ぶつかり合い、ことばで意志疎通を図る、ルールをつくる、変更するなど、次第に高度な社会的スキルを身につけていく(石井, 2002)。

砂上(1999)は、保育における子ども同士のかかわりにおいて、他者と同じ動きをすることが、その仲間としてのかかわりにおいて重要な役割を果たしていることを指摘しているが、子ども同士が身体を接触させている状態については触れていない。

幼児はことばだけでやり取りすることは少なく、身

体がことばの代わりや補足として機能している(無藤, 1997)が、特に、初めての環境で初めての人間関係を経験する3歳児にとって他のモダリティではありえない全身性のコミュニケーションである身体接触は、仲間とのかかわりにおいて欠かせない手段となっている(塚崎, 2002)。

子どもはほかの感覚にさきがけて触覚を発達させるので、人間関係も触覚的経験として把握され、触覚を通じて感情の種々相を成熟させる(野村, 1984)ことから、砂上の研究を踏まえて、3歳児の仲間関係における身体接触に注目することは、子どもの身体性の研究をさらに発展させることにつながるだろう。

砂上・無藤(1999)は、子ども間の仲間意識は当該の仲間関係に属する他者と同じ動きをすることと一体になっていて、仲間意識の共有として他者と同じ動きをすることが、関係の内部と外部に対してその関係を証明する機能があると指摘していることから、本研究では次のことを予想する。

仲間関係における身体接触には、

キーワード：身体接触、3歳児、仲間関係

* お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター

** お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター

1. 仲間関係のはじまり
2. 仲間意識の共有
3. 仲間関係のアピール

という3つの機能があると予想して、これに沿った具体的な事例の考察を行なうことを目的とする。

さらに、子ども同士が身体接触を成立させる要因を知るために、身体接触の成り立ちについて考察を行なう。同じ相手による身体接触でも親和的に発展する場合としない場合があることから、身体接触の発生と展開には、何らかの要因が働いていると考えられる。そこで、親和的な身体接触を支える要因と拒む要因を考察することを本研究のもう一つの目的とする。

II. 本研究における「身体接触」

本研究で取り上げる身体接触の発生パターンには、

1) 行為者から発生する身体の動きを受け手が受け取って成立する身体接触 2) 偶発的な発生によって成立する身体接触、という、2つの成立パターンがあると想定する。

1) のパターンは、行為者が何らかの目的をもって受け手の身体に触れることにより、受け手がその意味を解釈して成立する身体接触だが、2) のパターンは、行為者による意図的な身体接触ではなく、事後的な要素を含む身体接触のことである。

また、身体接触における行為の展開としては、

1) 親和的展開—受け手が行為を肯定的な意味に解釈した結果、身体接触が親和的な意味のものに発展する

2) 展開なし—受け手が行為を理解できずに無視したり、反応を返さないために自然消滅したり、ものわかれに終わったりする

3) 反発的展開 (いざこざ、第三者の介入) —受け手が行為を否定的な意味に解釈した結果、拒否や抵抗の反応から、いざこざや第三者の介入に発展するという3つの展開パターンがあると想定する。

本研究では、保育場面における身体接触の発生と展開には以上のパターンがあると想定して、観察された身体接触の分類を行うことにする。

III. 方法

調査対象 都内公立幼稚園の3歳児クラスB組、男児6名、女児8名、合計14名の園児と保育歴23年の経験を持つ保育者1名を対象とした。

調査期間 2001年4月末～2002年2月末までの間に、週1回から2回の頻度で登園からお昼の時間まで、または降園までの時間を観察した。

調査方法 VTR撮影とメモ書きによる観察を行った。園内全ての場所における撮影を許可されていたので、あらかじめ保育者と相談の上決定した観察日に、B組の子どもと保育者のかかわりを中心に、特に身体接触を伴うやり取りが発生しそうな、いざこざの場面や保育者の動きを追いながら撮影を行った。観察された全てのデータを文字化して、その中から身体接触の場면을エピソードとして抽出し、さらに身体接触の始まりと終わりが収録されたものや、注目すべきエピソードに関しては、事例として取り上げて考察を行った。保育者との話し合いを通してエピソードに対する意見交換をしたり、子どもの家庭状況や、観察日以外の日に起きた出来事などの情報を提供してもらうことにより、考察する上でより正確な解釈ができるように心がけた。

分析方法 合計38回分の観察で収録された1,456件の身体接触のエピソードを、観察日、場所、行為者と相手、場面、身体の動き、発話の有無(内容)、場面の補足/行為の展開、意味、時間の9項目に分けて記録し、14人分のデータを個別に分類した。また意味においては、保育者との話し合いにより、観察記録に基づいてコード化した。コード化は、親和的(親近感・思いやり・甘え)、否定的(不安・悲しみ・怒り・拒否・攻撃・抵抗・避難)、偶発的(無意識・興奮・よろけ)、中立的(誘導・呼びかけ・説得・介入・なだめ・補助)、不明(意味不明・その他の不明)、について行った。各項目における信頼性は、筆者があらかじめ項目に当てはまると思われる身体接触を前後30秒ずつ含めたものをそれぞれ20例ずつ用意して、筆者と1名の保育者間で確認した。評定者間の一致率は0.96が得られた。なお分類の不一致は、協議の上で調整をはかった。

身体の動きは、1つの行為につき1カウントとし「叩く」行為などで連続して叩き続けたとしても、1つの行為としてカウントした。しかし一旦行動が止まり再び叩き出した時は、新たな行為としてカウントした。

IV. 結果と考察

1. 仲間関係における身体接触の役割

仲間関係における相互交渉がエピソードとして頻繁に観察されるようになるのは、夏休みの直前頃からだった。その前にも子ども同士の短いやり取りは観察

されているが、親和的な雰囲気やルールを持った遊びが継続的に観察されるようになるのが7月頃からであった。何度か同じ相手とのやり取りが繰り返し観察されるようになり、そのうちに、リラックスして楽しそうな雰囲気が感じられるようになると仲間関係の成立とみなした。

〈仲間関係のはじまり〉

【事例1：押したり押されたり/9月21日】

K男とJ男は登園してきてすぐにF子をコップで叩いたり、身体で押ししたりすることによって、F子と関わりを持つ。F子は、それに対して嫌がったり、怒ったりせずに、「痛いでしょ!」と口調は強くても笑って対応している。J男はF子に「なんだ、おまえはー!」と言って突き飛ばした後、「どあー」と言いながら自分の顔をピシャピシャ叩く。それを見ていたF子は笑いながらJ男を押す。押されたJ男もうれしそうな表情でF子の手を取ろうとすると、F子は笑いながら逃げる。それをJ男が「つかまえるー」と言いながら、追いかける。J男につかまったF子はJ男に押しえつけられるが、F子もJ男のお腹を押す。F子は「きゃー」と言いながら再び逃げると、J男とK男がF子を追いかける。

【考察】

K男とJ男とF子のやり取りを観察していると、捕まえたり、追いかけたりしながら、遊んでいることがわかる。3者の間でなんらかのルールがあるようにも、またはそれぞれが何かの役を演じているようにも見える。見ていてハラハラするような不安定なものではなく、それぞれが、その身体的関わりを楽しんでいるような感じを受ける。押したり押されたり、突き飛ばし合ったりしてふざけ合えることが、相手を受け入れているというメッセージとなり、仲間としての関係が成立するきっかけとなっている。

【事例2：抱きついたり抱きつかれたり/9月21日】

G男は、H男の身体に顔を寄せて、H男の胸のあたりをポンポンとやさしく叩いたあと、H男の首に手を廻して肩に顔を当てて抱きつく。H男は「G男くん」と言いながら、G男の背中に手を廻す。その10分後に、G男がH男に抱きつく。身体を離れたあと、二人は手を繋ごうとするが、うまくタイミングが合わない。ふたりは顔を見合わせてから、照れ笑いのような笑顔を交わす。G男が走りだすとH男が後をついて走って行く。G男はお山の上まで走って行き、そこで変身のポーズを決める。

【考察】

G男とH男は、同じ場所にいたが、それぞれ勝手な事をしているようで、一緒に遊んでいるようには見られなかった。G男には、時々衝動的に嘔む行為があったため、突然G男がH男の身体に顔を寄せて抱きついたので、注意して観察した。H男の反応を心配したのだが、H男はG男を警戒せずに受け入れた。G男はH男のことが好きで、抱きついたのだろうが、H男も「G男くん」と言いながら、G男の背中に手を廻している。その後ふたりが手を繋ごうとしていることから、G男からの最初の接触が、仲間関係を成立させるきっかけになっていると考えられる。さらに、G男が走り出すと、H男もついて行っていることから、ふたりのやり取りが展開していることがわかる。G男がお山の上でポーズをとっている姿からは、「さあ、変身して一緒に遊ぼう!」と呼びかけているように読み取れる。

〈仲間意識の共有〉

【事例3：同じ動きをすること/5月21日】

この日はE子とC男と一緒に遊ぶ姿が何度か観察されている。お茶の時間に二人は一緒に並んで座り、C男がE子の頭を「ちょん」と言いながら軽く触ると、E子も「ちょん」と言って同じように触り返す。それを3回繰り返して一緒に笑う。C男がE子を身体で押すと押し返して笑う。その押し方も「ドン」という強いものではなく、C男と同じような力とスタイルでやり返している。その後C男がE子に誕生日について質問するが、E子の答えは的が外れている。C男は「違う」と言って繰り返すが、あきらめて、また「ちょん」とE子を触るがE子は触り返さず、お茶を自分のカップについて、そこからC男のカップにつき入れてあげる。E子もうれしそうに笑っている。しばらくしてC男が「あちー」といってE子に寄りかかるとE子も同じことを言って寄りかかる。C男がE子の顔に「ふー」と息を吹きかけると、E子は大喜びをしてはしゃぐが、同じようにそっと「ふー」とC男の顔に吹きかけ返す。2人の前で見ていたH男も「ふー」と2人に息をかける。C男が「ちこちちこち」と腕をくすぐると同じように返して、「がりがり」とするとやはり同じ動きをして一緒に笑う。その後もC男がいろいろな擬音を出しながら動作をすると、E子もそれをまねる。C男がE子のお腹を触ったのでE子も触り返した拍子にE子がC男のコップをたおしてしまう。C男が「濡れちゃった」とS先生に呼びかけると、E子は濡

れてはいないのだが「E子も濡れちゃった」と言う。その後もC男は濡れたまま、E子とふざけあって遊ぶ。S先生が「はい、C男くんは着替えよう」と抱きかかえて連れて行くと「E子も」と追いかける。

【考察】

E子は、モルモットのモルちゃんを力いっぱい抱いてしまい、S先生から「優しく抱っこして」とか「もっとそーっと」と言われても力加減ができなかったのだが、C男に「ちょん」と優しく触られると同じように「ちょん」と優しく触り返すことが出来た。子どもが、ある行動を体得するためには大人から言葉で説明されるよりも、仲間関係において、その行動を受けたり、まねしたりする方が体得しやすい。E子はC男とまねしあうことで、実に楽しそうな表情を見せているが、それはやり取りの面白さと同時にC男と同じ行動をすることによって仲間意識を体験する楽しさも実感しているように考察できる。E子の遊びは、クラスの子どもからは、なかなか受け入れられない事が多い。D子やI子とおままごとをして笑っている時でも、何かを演じているような笑い方をすることが多いのだが、この時のE子は、本当に楽しそうに笑っている。このエピソードのE子の笑顔から観察者は、「E子は、このように笑う子だったのだな」という印象をもった。

同じことを言いあったり、同じ動きをすることだけでも仲間意識を共有できるが、隣同士に座ったふたりが、同じ接触のやり取りを繰り返すことによって、相手の動きを直接体感することができ、また相手の接触の強さやリズムをまねし合うことによって、より刺激の具体的な意識の共有を支えていると考察できる。

【事例4：くすぐること/7月10日】

プールに入る準備の時間。子どもたちは消毒の順番を並んで待っている。C男は、はしゃいでふざけている。「う、う、う、う、風邪引いちゃうよう」と言いながら身体を揺らして横にいるH男を笑わせている。身体を一回りさせて、前に立っているK男の肩に手をのせて「風邪引いちゃうよ、くちゅくちゅくちゅ」と言うと、H男も同じ行動をして「風邪ひいちゃうよ、くちゅくちゅくちゅ」とK男の肩をくすぐる。C男もK男の背中を「くちゅくちゅくちゅ」と言いながらくすぐり始める。K男は眉をしかめて「いやあー」と声をあげて2人を押す。C男もH男も押されて笑っている。H男はまたK男に近寄り「くちゅ」と手を出すともう1度押される。H男は少し驚いた顔をするが、押し返さないで見ている。H男はC男の背中を「くちゅくちゅ

くちゅ」とくすぐり始める。C男が「きゃー」と言って首をすくめて「うふふん」と笑うとH男も笑う。H男はまた、C男が最初にしたように身体を一回りさせて「うー風邪引いちゃう、くーちゅくちゅくちゅ」と言ってC男の背中をくすぐる。C男はくすぐったように身体を動かす。C男の消毒の番がやってきてC男は消毒のタライに入る。

【考察】

プールに入る前のC男とH男ははしゃいでいる。H男はC男のしぐさや言葉を真似している。H男はC男がK男をくすぐったので、まねして自分もくすぐる。C男とH男はくすぐり合うことで「おもしろい」気持ちを共有しているが、くすぐられたK男は不愉快な表情をうかべて「いやあー」と嫌がっている。この3人中で、くすぐり合うふたりの間には、その行為を通して仲間意識が共有されるが、K男はその場においても、くすぐり合いに参加していないので、同じ気持ちを共有することができない。

〈仲間関係のアピール〉

【事例5：手を繋ぐこと/5月30日】

A子とF子が手を繋いで園庭を走った後に、M子とB子が参加する。A子が甲高い声で「そうだ！こっちに来て！」とM子に呼びかけるとM子がうれしそうに笑いながらついていく。そしてM子が「繋ごうよ、手」とA子に言う。差し出されたA子の手に、M子は腰をまげて両手でつかまり、手元を見てすぐ手を離し「行こう、あはははは」と言って走り出す。A子は追いかけて、今度はA子の方から「よし、行くぞ！」とM子の手をとるが、M子は立ち止まり腰を引いて、A子と繋ごうとしている手の向きを何度も変えて、終いにはもう片方の手でA子の腕をつかんで自分の指をA子の指の間に一本づつ差し込む。この行為を何度も繰り返す。立ち止まって手を繋いで是一緒に走り、手の向きが気になって離しては手を見つめて洋服で汗をぬぐって、また手を繋ぐ。A子は笑いながらM子が持っている手を軸にしてぐるぐる回る。M子もうれしそうに表情で笑いながらぐるぐる回る。「目が回る」と言い合って再び手を繋ぎ合う。手を繋いでいるA子とM子を見てS先生が「あら、仲よしになったの？いいわね」と声をかけ、もう1度「A子ちゃん、M子ちゃん、いいわね、仲良くなったの」と声をかける。手を繋いでいるA子の顔は笑っているが、M子は真剣な表情で、神経が手にいっているように観察される。何度か手を繋いだり離したりした後、M子がA子の手をつかむと、

A子は、手をさっと上に引き、M子が「手、繋ごうよ」と言っても首を振ってその日はもう繋がらない。

【考察】

F子と手を繋ぎなれているA子と、友だちと手を繋ぐことでは初心者M子は手を繋ぐ向きがうまくかみ合わなく、感覚的にも決して快適ではなさそうなにも関わらず、何度も手を繋ごうとしていることから、「手を繋ぐ」という行為にこだわっていることがわかる。主導権はA子が握っていて、走って行く方向はA子が決めている。手を繋いだ2人は「あははは」と笑いあい、山に登って一緒に「やっほー」と叫びあう。また「よし！いくぞ！」とか「よーし」「いこ！」「うわーい」などと言い合いながら、手を繋いで一緒に走ることを楽しんでいるのを見てとれる。しかし、M子はA子の口まねをしながらも、何度も手を両手で押さえて繋ぎ直す。立ち止まるたびにかがみ込んで手を繋ぎ直す。A子が動くとき「動かないでよ！」ときつい口調で言いながら手を繋ぎ直している。

この一連の行為の始めにM子が「繋ごうよ、手」とA子に言っていることから、M子は、F子とA子が楽しそうに手を繋いでいる姿を目にして、自分もA子と手を繋いでみたいと思ったのだろうと推測できる。しかし、実際に手を繋いでみると、思ったほどに快適ではなかったことが、向きをかえたり、繋ぎ直したりしていることからわかる。それでも、M子は、手を繋いでいたい。A子はM子が何度も手を繋ぎかえたり、「動かないでよ！」と強い口調で言うので、手を繋ぐことをやめてしまう。M子が再び「手、繋ごうよ」と言っても首を振って手を繋ごうとはしない。M子が快適でもないのに、手を繋ぐことにこだわった理由には、S先生の「いいわね、仲良くなったの」という言葉かけが、うれしかったこともあるのではないだろうか。

A子とF子が手を繋いでいる姿に仲間関係のアピールを感じたように自分が今、A子との仲間関係をまわりの人たちにアピールしていることに満足しているからこそ、たとえ感覚的に快適でなくても、もっと手を繋いでいたかったと考えることができる。

【事例6：一緒に戦おう！/10月10日】

J男、G男、C男、N男がそれぞれ武器を持って遊んでいる。K男は武器を持っていないが、変身のポーズをとっている。J男が武器を持ってふざけて走っていて転んでしまう。G男が駆け寄り「だいじょうぶか？」と言いながら、J男の足をさす。そして「一緒に戦おう！」と言う。近くにいたN男が「逃げるの

だ、逃げるのだ、早く、早く！」と言いながら、J男を自分の身体で押す。G男にN男が剣をかざして飛びかかると、G男はふざけてのた打ち回る。これを何回も繰り返しては大笑いをする。G男も笑い、回りで見ている子どもたちも笑う。S先生が「気をつけないとけがするよ」と声をかける。K男やC男も一人で倒れたりして暴れる。

【考察】

J男、G男、C男、N男、K男は、グループになって戦いごっこをして遊んでいる。誰が味方で誰が敵なのか、観察していても定かではないのだが、G男はJ男が転ぶと駆け寄って「だいじょうぶか？」「一緒に戦おう！」と声をかけていることから、少なくとも、G男とJ男は味方同士なのだということがわかる。恐らくこの時点ではまだ彼らの中に、敵味方というルールはそれほどしっかりと成立していないように観察されている。単に自分たちで勝手にばたばたと倒れて床に身体を撃ちつけては暴れて、一緒に戦いごっこの臨場感を出して楽しむ仲間として存在しているようだ。同じ場所にながらも、それぞれが別々の方角に向って変身のポーズを決めたり、ブロックの上から順番にポーズをとって飛び降りている姿からも、1つのテーマを共有している平行遊びであると理解できる。それぞれが違った相手を味方だと思っている可能性もあるし、ただ武器をつけてばたばた倒れる感覚が面白くて遊んでいる子どももいるのかもしれない。しかしG男が「だいじょうぶか？」と言ってJ男の足をさす行為は、J男にG男が味方だということを意識させ、回りにもそれをアピールしたことは事実である。身体を撃ちつけたり、蹴ったりする暴力的な接触がメインの戦いごっこの最中で、転んだ友だちに駆け寄って、足をさすという親和的な身体接触が、彼ら二人が仲間、または味方同士なのだとすることを際立たせているからである。身体接触は、数人の子どもでのやり取りの中で、誰と誰が仲間関係にあるのかを分かりやすく回りに示す機能を持っていると言える。

2. 仲間関係における身体接触を支える要因

仲間関係における身体接触の発生と展開には、以下の9つの要因が影響していると推測してそれぞれの要因に沿った事例の考察を行う。

*力の調節/【事例：7】【事例：12】

*状況判断/【事例：8】

*発話の有無/【事例：9】【事例：11】

*行為の方向性(双方向的か、一方的か)/【事例：9】

【事例：11】【事例：15】

*意味の共通理解/【事例：13】【事例：14】

*認知/【事例：8】

*情動調節(感情的や衝動的な行為であるか、ないか)/
【事例：11】

*体格のバランス/【事例：10】

*相性のよし悪し/【事例：15】

【事例7：力の未調節/5月21日】

滑り台の上に座っているA子の首に、E子が後ろから強く抱きつく。A子がひっくり返りそうになる。S先生が気付いてE子の手を解く。またこの日、E子はモルモットのモルちゃんを抱っこするが、S先生に注意されてもモルちゃんをそっと抱けずに、ぎゅっと抱きしめてしまう。「E子ちゃん、もっとそっと抱いて。そんなにぎゅっとしたらモルちゃん苦しいって」とS先生に手で誘導されても力を入れてしまう。S先生は「E子ちゃん。優しく抱いて。やさしくってわかる？そーっとそーっとよ」と言う。

【考察】

E子の身体接触が回りの子どもに警戒される理由にE子の力の強さがある。E子は体格のしっかりとした子どもだ。E子が「遊ぼうよ」と触ったり、抱きつく力は強く、相手に痛みを与えてしまう。E子は自分の気持ちが相手に正しく伝わらないもどかしさを味わうようになり、またS先生の介入もあって、友だちにそっと触れる事ができるようになるのだが、この時点ではまだ、他者に対する力加減ができていない。

モルちゃんをそっと抱けない事例からは、E子が力加減ができないことがわかると共に「そっと触る」ことを説明して教える事の難しさを感じる。E子が友だちをそっと触れるようになるには、友だちとのやり取りで、自分の身体接触が受け入れてもらえない悲しみと、友だちからそっと触られる経験が必要となる。

【事例8：状況判断・認知不足/5月25日】

F子とA子がマットの上で抱き合っている。それを見たE子は、すかさずその上から自分も抱きつく。F子とA子はこの時期一緒に遊ぶことが多く、仲が良いので手を繋いだり抱き合ったりするのだが、それを見るとE子もまねして2人の中に入って行く。F子もA子も2人の中での身体接触はお互いに受け入れ合っているが、E子がくると拒絶の声をあげる。

【考察】

E子は、仲よし同士のF子とA子が2人で抱き合っ

ているところに割り込むことに遠慮がない。遊びに入っていく時の「いれて」ということばかけもなく、また、F子とA子とは、日頃からのやり取りが少ないために、お互いの認知が足りない状況であるにもかかわらず、まったく躊躇せずに割り込んで行き、拒否されている。状況判断と相手の認知ができていないことが原因の否定的展開例。

【事例9：発話無し・一方的/10月10日】

S先生に抱かれて泣いているD子のところに、ロングスカートをはいたI子が近寄ると、G男もやってきて後ろから突然I子に抱きつく。I子は振りほどいて小走りに逃げる。それを見ていたS先生は「あらー、ぎゅーってしたいの。I子ちゃんって、一緒に遊ぼうって」「かわいいのかなー、I子ちゃんって。I子ちゃん、かわいい？G男くん」とG男に向かって話しかけるが、G男は無視して移動してしまう。

【考察】

G男が突然I子に抱きついた行為は、その前後のI子との相互交渉がないことから、意味不明である。その上、まったくの発話なしに、突然背後から抱きつかれたので、I子は不快に感じたようで移動してしまう。

【事例10：アンバランスな体格/10月10日】

E子は、体操の時間にドラエモン体操の音楽がかかると笑顔になり、観察者に体当たりした後、走って行って、ままごとコーナーで絵本を見ていたG男の頭を叩く。G男が怒って追いかけてくると、S先生に飛びついてぶら下がる。S先生はE子を抱き下ろし、お友だちにぶつからないようにと注意するが、E子は皆と違った動きをして回りの子どもにぶつかって、喜んでいる。E子は再び観察者に飛びついた後、I子にそっとしがみつくと、I子は「いやだ！」とはっきり言う。すると、E子は無然とした表情になり「E子、やさしくやっている、やさしくやっているのに」と言う。S先生が「やさしくやっても嫌なんだって」と言う。E子はその後、K男に抱きつこうとするがK男は避ける。

【考察】

E子はお気に入りの体操の音楽がかかると、衝動的にまわり子どもに体当たりしたり、叩いたり、飛びついたりしている。しかし、好きなI子にはやさしくしがみつくと、ところがI子に拒否されて「やさしくやっているのに」と無然とする。S先生はそれに対して「やさしくやっても嫌なんだって」と説明する。E子は身体接触を成立させる為には、「やさしくやる」必要があ

ることをすでに学んだことがわかる。しかし、状況に合わない自分勝手に衝動的な抱擁はドラエモン体操をしているクラスの友だちには受け入れられない。E子は、いくらやさしい力であっても、状況や相手の気持ちを無視して一方的に抱きつこうとしても受け入れられないことを学ぶことになる。

この事例からもう一つ言える事は、身体接触がどこちなくなる、または相互理解を拒む要因にE子とI子の体格差があるということだ。体格の良いE子が普通にI子に抱きつくと、華奢なI子にとっては力が強すぎるし、また身長差から調度首をしめられるような形になってしまうのである。E子にはまだ、このような差に気づくだけの認知能力はない。しかし、相互交渉を繰り返したり、保育者の的確な介入によって、E子の配慮性が発達し、仲の良い友だちとスムーズな非言語的やり取りが可能になって行く。

【事例11：発話無し・一方的・衝動的/10月10日】

体操の時間にS先生が「はい、今度は地球はどんどんしまーす」と子どもたちに声をかけると、歓声が上がり飛びあがって喜ぶ子どももいる。L子は近くにいたI子にそっと抱きつこうとする。I子はそれを見て、自分の手をL子のわき腹に当てて二人は抱き合う。しかし、L子の抱擁がきつくなると、I子は「いやだ、いやだ」と言う。すると、L子はむきになったように、さらに強くI子の首にしがみつくと、I子は押しのける。L子は逃げようとするI子をもう1度抱きしめるが、I子の首に手が回ってしまい、くるしくなったI子は嫌がる。L子は真剣な表情でI子にしがみつき、自分の顔をI子の顔にこすりつける。I子は「いやだ、いやだ」と嫌がってもだえる。「いやーだよ」と言って、I子はL子の腕から逃れると、二人は顔を見つめ合わせるが、次の体操の曲がかかると、L子は踊り出す。また、その後、L子は体操の音楽に合わせて歩いているF子の手にしがみついて身体を寄せる。F子は「いやーだ」と言う。それを見ていたB子が「F子ちゃん」と言いながら自分もF子と手を繋ごうとすると、E子も来てF子をつかまえようとする。F子は怒ってL子を突き放す。L子は驚いた表情をする。

【考察】

体操の時間は子どもたちがはしゃいだり興奮したりする。特にこの頃は「地球はどんどん」体操が子どもたちのお気に入りだ。入園当初は参加しなかった子どもでも、この時期になると、音楽と踊りを覚えてリラックスして体操が出来るようになった証拠だ。S先生の

「はい、今度は地球はどんどんしまーす」という呼びかけで、嬉しくなった子どもたちを見て、日頃は自分から行動に出ることの少ないL子が近くにいたI子に抱きつく。I子は最初は戸惑った表情を浮かべるが、相手が小柄で日頃からおとなしいL子であり、またそっと手を差し伸べているのを見て、自分から手を出してL子に抱きつく。ところが、I子を抱くL子の力が強くなってしまい、I子が「いやだ、いやだ」と言い出す。L子は逃げようとするI子を無理に抱きしめてしまい、かえってI子から抵抗を受けてしまう。自分から逃れようと抵抗するI子の顔にL子は自分の顔を擦りつける動作をする。それは、子猫などを抱いてかわいくて自分の顔を擦りつける時にするようなしぐさなのだが、一方的であるために、I子にはもっと嫌がられてしまう。L子の腕からやっと逃れたI子はL子の顔を見る。二人は無言でみつめあう。

I子はL子から去って行き、L子は次の曲が始まると踊り出す。L子とI子の間に会話がないために、どうしてI子に嫌がられたのかをL子が理解することは出来ない。またL子が、何故I子を抱いたり、顔を擦りつけたのかを説明するのは年齢的に不可能である。

その後もL子はF子の手をつかんで自分の身体に引き寄せようとするが、やはり発話を伴わない行為であることと、一方的であるために、F子から突き放されてしまう。

L子は友だちとの相互交渉が少ないという点で、保育者と観察者の意見が一致している。その背景にはL子の姉が同じ幼稚園に在籍していて、幼稚園でも姉と遊ぶ機会があるため、友だちとの関わりに影響していること、また小柄であり、慎重な性格であることも要因として考えられる。

身体接触個人表においてもL子のエピソードは他の子どもに比べて少ない。そのL子が、体操という身体を使って遊ぶ時間に自分から他者と関わりを持とうとするようになった変容は大きい。しかし経験不足から、なかなか思ったようには成立しない。その原因となっているのは、身体接触が一方的であるということ、それまでの相互交渉の少なさから相手による認知が十分でないこと、また身体接触をサポートする発話がされていないことなどが考えられる。

【事例12：力の未調節/9月10日】

H男がマットの上にあがって来て座ると、すでにマットの上にいるE子は、H男と向い合って座り「にゃお、にゃお」と鳴く。H男も「にゃお」と答える。さ

らにE子は猫の手をしてH男の顔を叩くが力が強すぎてしまう。H男はE子を叩き返して、E子の頭に噛みつく。S先生がすぐにH男を引き寄せてE子から離す。S先生はH男をなだめた後E子を抱き上げて向かい合って話しかける。そして最後にE子に「わかった？」と聞くとE子はうなずく。E子はS先生から下ろされると激しく4回飛んだ後、教室にかけて行く。しかしE子はすぐに戻って来て、今度はK男とH男が滑り台の上にいるところに登って行き二人の上に倒れ込んで行って押し合いになる。K男が泣き出して、S先生は「押す人は降りてもらいます」と言ってE子を滑り台から抱いておろす。

【考察】

この時のE子は、猫になりきって遊んでいた。そのためマットの上にあがってきたH男にも「にゃお、にゃお」と呼びかけた。するとH男も「にゃお」と答えたので、ごっこ遊びが成立するかのように見えた。E子もそう思ったのではないだろうか。ところが、猫を真似た手のしぐさでH男の顔を触るつもりが、力が強すぎて叩いてしまう。H男が叩き返すだけでなく、噛みつくこうとしていることから、E子の行為を悪意にとったことがわかる。E子の身体接触の意味が相手には違った意味に受け取られて拒否されることから、E子の気持は満たされずに激しい行動がさらにエスカレートしていくようだ。E子がS先生から降りてすぐにどんと飛び跳ねている時の表情はいらいらしたものであるし、その後すぐに何かの用事があるかのように教室の方に勢い良く走り出している。E子は教室からすぐに戻って来て滑り台に登り再びK男とH男と滑り台の上でいざこざを起し、S先生に滑り台からおろされる。

E子の衝動的な身体接触は、相手に受け入れてもらえず、そのもどかしさが、さらに、E子に次々といざこざを起こさせているように思われる。

【事例13：意味の共通理解/9月14日】

滑り台遊びは5月21日から観察されているが、順番待ちの時間に押し合いになっていざこざに発展することがたびたびあった。この日、滑り台遊びでI子がA子の背中に手をそっとのせる光景が観察された。A子は気にせずに滑り降りた。その後A子は滑り台の上に座っているN男の背中を押して「ちょっとどいてよ！行って！合体しないの、これは」と言う。言葉は強いがそっと押しているの、N男は振り返ってA子の顔を見て、黙って滑り降りる。次に、H男が座っている

A子の頭をそっと撫でるとA子は滑り降りる。また、K男がなかなか滑り降りずに座っているとH男が体全体でK男のことを押す。K男は、「H男ちゃん、だめ、だめ、H男ちゃん」と言うが、H男は辞めずに押す。K男は滑り降りずにふたりは押し合いになるが激しいものではなく、押し合いながらじゃれているような様子である。そこにE先生が通りかかり「早くすべってって言ったら？」と声をかける。K男は滑り降りる。

【考察】

滑り台の上に座ってもすぐに滑り降りない子どもは、どんな格好で滑り降りようか思案しているのか、それともすぐに滑り降りてしまうのが惜しくて、しばらく上からの景色を楽しんでいるのだろうか。子どもたちは、なかなか滑り降りないのである。5月の中旬に始まった滑り台遊びは、階段での順番待ちでの押し合いや、上に座った子どもをすぐ後ろの子どもがせかして押すことから、保育者が一人つかないと危ないほどであった。しかし、この日、相変わらず押し合いがあるものの、保育者の手が出ることは1度もなかった。

特に上に座った子どもをせかす時に、そっと押ししたり、身体に触れて「早く、後ろにきているんだよ」と知らせる様子が暴力的ではなく、明かに誘導としての接触と読み取れたのだが、接触された側、つまり受けての子どももそのように理解しているようなのである。これは、子どもたちが繰り返し滑り台遊びを経験したことから、力加減をして押ししたり、または優しくふれることを学んだことからくるのだろう。またE先生が「早くすべってって言ったら？」と言うと、「早く」といいながら、押すようになり、ただ突然押すのではなく「早く」と言いながらそっと押すことができるようになってくる。

このように、1つの遊びを繰り返し行うことで、子どもたちは適度なタッチとことばがセットになったメッセージが、効果的に相手に伝わることを学習する。

【事例14：意味の共通理解/2月1日】

9時18分。B組の子どもたちが次々に教室に入ってくる。F子がC男を見つけて、後ろから抱き付いて両腕をつかんで引っ張る。C男は笑いながら逃げる。F子も笑ってC男をつかんだまま追いかける。J男が教室に入って来て、そこに立っていたL子に抱きつく。L子はJ男を抱きとめて笑い、J男から手を離して逃げる。J男は追いかけて、L子のかぶっていた帽子を前にずらして「あーはははは」と自分の頭を叩いて喜んで笑う。

【考察】

子どもたちは、登園してきたばかりで、その前のやり取りはないはずなのに、いきなり抱きついたり、引っ張ったり、つかんだりする行為がやり取りされる。

行為の受け手は、それを嫌がるわけでもなく、笑いながら受け取っている。このことから、子どもたちの間では、「誰がどのような行動を取りやすいのか」ということと、「それが何を意味するのか」という情報の共通理解が成立していると考えられる。

発話を伴わず、衝動的な行為であるにもかかわらず、遊びに展開していることから、たとえ暴力的な行為であっても、状況や意味の共通理解があれば親和的な身体接触が成り立つことがわかる。

【事例15：双方向的・良い相性/2月1日】

K男がB子の両腕をつかんで話し掛ける。K男はB子が軽くピョンと飛ぶと同じようにピョンと飛ぶ。B子が両手でK男の両手をもって引き寄せて、K男の背中に手を当てて教室の中を一緒に歩く。K男が「ブーメランはどうするの？ブーメラン」と言い、二人は椅子に座る。K男は椅子にもたれて、B子の背中に手を当てて話す。立ち上がると、K男とB子は手を繋いで教室の中を話しながら歩く。K男が「じゃあ、***やる？***やろう。大人のおかあさんやる？」とB子に聞く。手を離しても、K男はB子の袖につかまって一緒に動いて、テレビ番組の話をしている。K男とB子が再び手を繋いでベランダに出るが、すぐに戻って来て、手を繋いで教室内を歩く。B子が手を離してもK男はB子の背中を触っている。二人にJ男が加わって戦いごっこが始まる。B子は「スマッシュブラザーズごっこだからね。」とK男の手を引っ張って廊下に出て行く。(9:18—9:58)

【考察】

K男とB子の仲の良さは、一学期にもすでに観察されているが、このように長い時間双方向的なやり取りが観察されたのは、この時が初めてである。

K男がB子を引き寄せて、B子の動きをまねると、次にB子がK男を引き寄せて、K男の背中に手を当てて教室の中を一緒に歩く。すると、K男がB子の背中に手を当てて話しかける、というように、どちらかの一方的な接触ではなく、双方向的なやり取りが成立している。ふたりは、お互いの身体の一部を接触させながら、一緒に遊ぶ話を楽しそうにしていることから、ふれることによって、より相手を身近に感じながら、仲間意識を共有していることがわかる。

V. 全体的考察

松井・無藤(1999)の、仲間との相互作用のきっかけに注目した調査からは、3歳児は、年長児と比べて「いれて」という幼稚園の仲間入りルールが定着していないこと、そのため、仲間と同じような体の動きや声によって自然に相手の活動へ入っていくことが多く、例えば戦いごっこをしている仲間の前にポーズをして構えるなど仲間と同じような体の動きによって、その中へと自然にひき込まれていくことが明らかになっている。このことから、ことばで明示的な仲間入りをするよりも、押ししたり、抱きついたりすることによって、仲間関係を成立させることが、特に、躍動遊び：オープンスペースで、走る、とびはねるなどの動的な場面(松井・無藤、1999)において有効であると言える。

3歳児の仲間関係において、身体接触は、ことばや他者と同じ動きをすることと同じように、コミュニケーションを支えあう役割を果たしている(塚崎、2002)。相手を身近に感じたり、感覚的刺激をともなう面白さを味わうことができるだけでなく、離れた場所にいる人間にまでも他者と自分の親密な関係をアピールすることができる身体接触を、子どもは仲間関係において積極的にやり取りし合っているとと言える。

また、身体をぶつけ合うような遊びは、入園当初には見られない行為であることから、身体的な遊びが見られるようになることが、子ども同士が打ち解けて合って仲間関係が成立しつつあることを表すサインになっているとすることができる。

子ども同士の身体接触の展開を左右させる要因には、力の調節、状況判断、発話の有無、行為の方向性、意味の共通理解、認知、情動調節、体格のバランス、相性がある。

親和的展開の要因としては、「力の調節、意味の共通理解、認知、相性の良さ、双方向的、ことばによる支え、情動調節」がある。

一方、展開なし、及び反発的展開の要因としては、「力の未調節、体格差、曖昧な行為による意味の取り違い、認知不足、相性の悪さ、一方的、ことばを伴わない、状況判断の欠けた感情的・衝動的な状態」がある。

さらに、3歳児同士の身体接触も、成人対象の調査結果と同じく「気持ちが良い」という感覚的なものよりも、接触の意図や相手との相性、状況判断や認知に

よって評価される（土田・竹村、1996）ことがわかった。

参考文献

- 石井富美子．(2002)．乳幼児期の発達的特徴 石井哲夫・無藤隆 「新・保育士養成講座 第3巻 発達心理学」 第3章 section 4. 社会福祉法人全国社会福祉協議会, 120-127.
- 松井愛奈・無藤隆．(1999)．「幼児の自由遊び場面における、仲間との相互作用のきっかけ(2)」．*日本発達心理学会第10回大会論文集*．
- 無藤隆．(1997)．「共同するからだことば-幼児の相互作用の質的分析」．金子書房．
- 菅原和孝・野村雅一編．(1996)．「叢書 身体と文化 第2巻 コミュニケーションとしての身体」．大修館書店．
- 砂上史子．(1999)．「保育における身体性—幼児の相互作用における「同じ動きをすること」について—」．平成10年度お茶の水女子大学人間文化研究科修士論文．
- 砂上史子・無藤隆．(1999)．「子どもの仲間関係と身体性—仲間意識の共有としての他者と同じ動きをすること—」．*乳幼児教育学研究*, 8.
- 土田昭司・竹村和久．(1996)．「対人行動学研究シリーズ4 「感情と行動・認知・生理」 感情の社会心理学」．誠信書房, 145.
- 塚崎京子．(2002)．「保育場面における身接触—3歳児における変容—」 平成14年度お茶の水女子大学人間文化研究科修士論文．

付記

観察をさせていただきました幼稚園のS先生と園児の皆さまに心から感謝いたします。